

CANDARとの連携に関して

鯉渕 (NII), 中野(広大)

いただいた懸念1:継続性

- 1年前に開催がきまっていることを確認
 - IEEE CS,ACM主催会議でも想定外で1年前決定例有

懸念2:査読の質

コミットメントのイメージ

- CANDARの現状
 - 4人査読者→判定がバラけるのは、他の国際会議も一緒
 - Face-to-Face PC会議無し
 - Trackによっては、メール審議有
 - WS毎に招待講演
- WS / Special Session化して質保証
 - Face-to-Face PC会議, CFPを独自に配布可
 - 例:IEEE MCSoc(h5-index=6)の Special Session on Auto-Tuning for Multicore and GPU (ATMG)

論点

- 「トップ会議であれば貢献したい」→ CANDARは向かない
 - 「一流レストランを田舎につくっても人はこない。田舎にはファミレスが喜ばれる」方針
 - MCSoc-13@NIIでトップ会議のSC, Track chair4名の招待講演を企画したが、参加者数少
 - アジア, 豪州, 南米開催の幅広いトピックを扱うトップ会議のモデルは？
 - ASP-DAC(h5-index=27)はトップ会議とシスタカンファレンス化
 - HiPCとは背景が違う
 - CANDARはISPAN, ISPAのようなオーナー社長による軽量の運用が魅力
- 問題？: Main Trackの不採録論文(の一部)を併設WS, ポスターへ
 - SACSISも不採録論文をポスターへ誘導
 - 国際会議でも割とある話
- 「CANDARへの個人ベースのゆるい協力」体制の維持？
 - 研究会の協賛は考えない？